

れる。そのような轉換の契機をなす淨心の證得とは、無始時來の能所二執が破析せられて眞如法性の了承せられることを言い、空すらも實體的に執取する惡取見の空無せられたる態を言う。そこにおいては淨土も穢土と別離に實體的に存立するものではなく、煩惱の汚濁に覆障せられた世俗の上に開顯せられてゆくものとなるのである。そのような淨土の眞義が了解せられた態が、淨心すなわち信心の證得せられた態なのである。故に長行の冒頭において提起せられた、論の課題である起觀生信の問題は、この不虛作住持功德成就において答釋せられているのである。即ち世親においては、止觀雙運行を離れて信心證得は考えられなかつたのである。廻向門において示される善巧方便すなわち方便智業は、かくの如く信心を證得し柔軟心を成就して、無住處涅槃に趣入せる八地以上の菩薩にして可能であるから、それは淨土の行と言われる。

即ち善巧方便とは、前四門が勝義なるものに向つて趣入してゆく方向であるに對して、勝義から世俗への廻入の方向を示すものである。換言すれば、出世間無分

別智の後得清淨世間智への展開としての意味を荷うものである。そこに菩薩の心が般若心・方便心・無障心・勝真心と説かれる所以がある譯で、論は畢竟して無住處涅槃なる菩薩につき明かせるものである。

そのように善男子善女人が信心證得して菩薩に轉成することが、佛身顯現の成就すなわち三種莊嚴功德の成就と即一的なのである。その即一性を示すものが、願心莊嚴の語であり、有情成熟と言ひ國土清淨と言ふも、凡べては眞如法性の世間的實用に他ならぬから、入一法句と示されるのである。

佛教の業論より見たる親鸞聖人の宿業觀

舟橋 一哉

我々がこの世において受ける苦樂の境遇と、この世において各々が造り出して行く業と、この二つについて考へて見ると、前者は受動的に受けとつて行くものであるのに對して、後者は能動的に創造

して行くものである。このことは、苦・樂といふものが佛教では一般に受の心所(領納の義)として考へられてゐるのに對して、「業(カルマ)」には「創造する」の意味があることによつても、容易に想像できる。ところで、この二つを佛教その他ではどのやうに考へてゐたか。

一、宿作因外道の説。苦・樂の境遇は、すべて宿世において造つたところの業によつて決定せられてゐて、我々の自由意志のはたらく餘地は全くないと考へ、従つて、人間がその理想實現のために精進努力することを、有意義なるものとして認めることをしなかつた。その點においては、我々の業はすべて無意義である、と考へてゐた。

二、阿含經に顯はれてゐる原始佛教の説。苦・樂そのものに對して鋭い觀察の眼を向け、結局、苦・樂は心の影のやうなものであることを説いて、苦・樂の無自性なることを教へた。我々の業は人間の理想實現のためには有意義なるものである、と見てゐたことは勿論である。

三、部派佛教の中の有部の説。我々がこの世において受ける苦・樂の境遇は、

一部分は宿業によつて決定せられてゐるが、他方において、我々の自由意志にゆだねられてゐる部分もある。この點において、我々は或る範圍において運命を開拓し得る自由を有してゐるわけである。従つて我々の業は、その意味において自由であり、有意義である。後世、佛教一般において考へられて來た宿業説は、恐らくこのやうな形のものであつたのであらう。

四、親鸞聖人の宿業觀として、歎異鈔の第十三章をとり擧げるとき、そこに見られるものは、佛教一般の宿業論から見ると、極めて特異なものである。即ち、

1、從來の宿業説は、我々がこの世において受ける苦・樂の果報が宿業の結果であることを説くのみであつて、我々の業までも宿業によると説くことはなかつた。所謂「因是善惡、果は無記」(異熟因、異熟果)で、この果は異熟無記たる果報を意味してゐた。歎異鈔の宿業觀では、「因是善惡、果是善惡」(同類因、等流果)であつて、従つてこの果は、嚴密な意味では、果報(及ち異熟)ではない。

2、佛教の根本思想は「無我」を説く

所にあるが、この無我説が最も徹底した形で説かれたのが、親鸞聖人の「絕對他力」といふことである。歎異鈔の宿業觀は、この「絕對他力」の一つの表はれと見ることが出来る。その意味において、歎異鈔では、業論が佛教の中心思想を表明するものとなつてゐるが、親鸞聖人以前の佛教では、業論の本旨は勸善懲惡の人天乘を説く所にあつて、佛教の中心思想からは幾らか離れてゐる。

3、親鸞聖人以前の宿業説は、第三者の立場から事實を説明解釋するものであつたが、歎異鈔の宿業觀は、如來の本願の光に照らし出された罪業のわが身を省みての懺悔の表白である。

4、親鸞聖人の宿業觀に對する、佛教の業論の上における根據は、無表業説の上にこれを求めることができる。

佛教の中國的發展

道 端 良 秀

問題は印度佛教が中國に流傳されて、どのようにして中國佛教として展開した

か、と云うことである。即ち氣候風土、習俗慣習の異つた中國の國土に在つて、佛教がどのようにして流布されたか、漢學と云う古典の素養を身につけ、禮を尊び、孝を最高道德とする儒教の社會に對して、佛教はどうしてこれに對應したであらうか、と云うことである。と云うのは、佛教はこの社會とは凡そ反對であつたからである。人世の否定を説き、空苦無常無我を説く教であり、出來して道を求め、解説して涅槃の證を得る教であるからである。

世界觀、人生觀の異なつた、二つの異質の文化が、どのように調和し融合して印度的佛教が、中國的佛教となつて行つたかと言ふことである。佛教が印度の佛教から、中國人の佛教として展開して行つた経路を眺めたい、と云うのが、この小論のねらいである。

第一にどうして佛教が中國民衆に受け入れられたかに對しては先ず佛教が中國的なものとして、神仙的佛教となり、方術、呪術的な佛教として、これが説かれ受け入れられたことである。従つて初期の佛教は、少くとも道教的佛教であり、